



令和3年度

松浪小だより

第13号

学校教育目標……『豊かな心を持ち、自律して行動できる子』を育む学校

目指す子供像…『・進んであいさつする子・自ら学び、自分の考えが言える子・人の話が聞ける子
・元気よく友だちと遊ぶ子・進んで仕事をする子』

理想とする学校像……「共に学び 共に歩み 共に創る」

- ①児童や教職員が生き生きする学校
- ②保護者や地域から信頼される学校
- ③教職員が互いに研ぎ合う学校

令和4年1月31日(月)発行

茅ヶ崎市立松浪小学校 校長 安倍 武雄

決して許されないコロナ差別

新型コロナウイルス感染症が日本中で猛威を奮っています。本校でも、一時感染者が増加する場面がありました。オミクロン株の感染力の高さには戦慄を覚えました。それでも、31日時点では、ずいぶん落ち着いてきた感があります。感染された皆様にお見舞い申し上げます。感染されたことで子供たちの学校生活についてお困りのことがありましたら、どんな形でも結構です。学校までお知らせください。

子供たちにも話してきたことですが、今後、より大切になってくるのが感染した人への差別防止です。感染した人につらい思いや悲しい思いをさせることが決してあってはなりません。長野県の諏訪中央病院の玉井道裕医師が作成した「新型コロナウイルス感染をのりこえるための説明書」には、「コロナに感染することは事故です。どんなに気をつけていても事故（感染）は起こります。感染した人は「油断をしたり」「落ち度があったり」「軽はずみ」な行動をとっていたからではなく、まさに偶然が重なって感染しただけに違いありません。私たちは「どのような人にも感染のリスクがある」（ウイルスは人を差別しない）という科学的な知見を再度確認しなければなりません」とあります。個人を特定するなどということはもってのほかです。それを知ることでいったい何が生まれるというのでしょうか。人権の観点からも、感染した人が堂々と生活できるように配慮すべきです。

また、症状が回復した方々は、社会や学校に戻れるという本来喜ぶべき局面であるにもかかわらず、まだウイルスを持っているかもしれない「元感染者」＝「要注意人物」といった視点から差別的な扱いをされることが心配されます。しかし、国立感染症研究所のホームページによれば、

軽症・中等症において、感染性のあるウイルス粒子の分離報告は10日目以降では稀であり、これらの症例において、症状が消失してからも長期的にウイルスRNAが検出される例からの二次感染を認める報告は現時点では見つからなかった。また、退院後のPCR再陽性例における感染性や、再陽性例からの二次感染を認める報告も現時点では見つからなかった。こうしたことから、軽症・中等症においては、現行の退院基準（発症日から10日間経過かつ症状軽快後72時間経過）を満たした症例では、退院前のPCR検査の結果によらずこれらの症例からの二次感染のリスクは低いと考えられる。

とあります。国の認めた基準により保健所からのお墨付きをいただいたということは、他の人を感染させるリスクは限りなく低いのですから、まさに喜ぶべきことです。

現在の学校の対応といたしましては、少なくともまん延防止等重点措置が発出されている2月13日までは、茅ヶ崎市教育委員会から出されているガイドライン（「茅ヶ崎 コロナ学校」で検索していただければヒットします）に則って、レベル3の扱いに加えさらに規制を上乗せした形で学習活動を継続します。教室の換気と寒さ対策の両立についてはCO₂チェッカーを用い、窓の開け方、時間等の研究を進めています。依然、寒さを感じる子供たちもいると思います。寒さを感じる方はブランケット等の用意をお願いします。手洗いについては、固形石鹸に加え液体石鹸も使えるようにしています。休み時間の過ごし方等については、接触を避けるように声掛けをして、平時は原則マスク着用の指導を継続していきます。

それぞれのご家庭においても、塾や習い事での接触感染、人混みでの市中感染などにより一層気を付けていただいて、学校にウイルスを持ち込まないことについて引き続き今まで以上のご協力をお願いいたします。

いじめ防止月間に子供たちがつくった標語「その言葉、君はいいけど僕はいや」を思い出してください。この現状の中、私たちはどんな言葉をかけてもらったらうれしいのでしょうか。どんな言葉が人を傷つけるのでしょうか。それを考えたうえで、大人も子供も今こそそれを実践するときです。

スパイダーマンたちの学び

休み時間、私の体が空いているときは、校長室を開放しています。校長室に掲示してあるものを観察したり、ソファーに座ってお話したりします。最近では1年生がよく遊びに来てくれます。「クイズ出すね!」「(ホワイトボードのお絵かきを指さして)先生、これなんだかわかる?」などなどお話ししながら、自由に遊んで帰っていきます。



特に「スパイダーマンごっこ」を見ていると、とても興味深いです。全員スパイダーマンになりたいのが当たり前です。少しすると全員がスパイダーマンではお話が進まないのか、悪者になってくれる子も出てきます。スパイダーマンたちは糸を出すポーズをとりながら、悪者をやっつけるのですが、悪者もやられては終わりなので、どれだけやられても生き返ってきます。スパイダーマンは業を煮やして必殺技のベル攻撃を繰り出します。「このベルを聞いたらやられちゃうんだよ!!(ガラン♪ガラン♪)」。

それでも悪者はやられません。その結果、延々と戦い続けますが、本当は嫌々やっている悪者が、素に戻って「交代して」と言い始めます。「もう少し」とスパイダーマンは粘ります。そんなやり取りの中、気を利かせた子が「じゃあ、砂時計ではかろう」とアイデアを出します。「ベルが鳴ったら交代ね」と次第に子供同士でルールを決め始めます。遊びを通してお互いがどうしたら楽しく過ごせるかを調整する姿が見られました。

漢字も分数も水の三態も都道府県も大事だけれど、こうやって人と人が上手に関わることを集団の遊びの中で身に付けていくこともまた学校の大きな役割だと思うのです。

授業5分前の手洗い歌が流れるとこちらが特に声をかけなくても、スパイダーマンたちはしっかりお片づけをして教室に帰ることができるようになってきたのも大きな成長です。

コロナ禍の中でも、子供たちはたくましく成長しています。